日本人の傘の信仰

京のやすらい祭り　北区紫野今宮神社疫神送りの祭り

今宮神社の境内では、2組8人の大鬼が大きな輪になってやすらい踊りを奉納する。桜の花を背景に神前へと向かい、激しく飛び跳ねるように、そしてまた緩やかに、“やすらい花や”の声に合わせ安寧の願いを込めて踊る。「上野やすらい」と前後して「川上やすらい」も境内へ到着する。

「やすらい祭（花）」は桜の落花を疫神の飛散とみて、落花を鎮めるために「やすらえ（ゆっくりせよ）花よ」と大勢で歌い、踊る祭りとされている。京都北部の春の祭りである。平安時代末期の公家の日記を集めた『百練抄』の記録から、そのころすでに行われていたことが分かる。川上大神宮（京都市北区西賀茂）、玄武神社（京都市北区紫野）、上賀茂神社（京都市北区上賀茂）でも同じ日に演じられるが、もとは一つの祭りから分かれたものである。今宮神社の祭りに参加する地区は、現在は、上野、川上の二地区。

厄を払う花傘

　　祭りの主役ともいえる花傘。この傘の中に入って身を撫でると、身についた厄を払うことができると信じられている。

疫神送りは後の解釈　本来は豊作祈願　傘と同じ奥三河花祭の白蓋（神の依代）

　《花は桜ではなく稲》　やすらい花は、桜の花の散るのを疫神の飛散とみてそれを止める疫病神送りと解説されているが、踊りで歌われる歌の文句に稲の別名である「富草の花」ということばが出ることから判断して、本来は、稲の花の飛散を止める豊作祈願の祭りであったと考えられる。年末から正月にかけて天竜川沿いで演じられる花祭も稲の豊作祈願が本来の目的であった。疫神送りはのちに習合した性質。

大小鬼

　青年の扮する大鬼四人（赤・黒のシャグマをかぶり、締太鼓または擂鉦を持つ）と少年の扮する小鬼二人（赤いシャグマをかぶり胸に鞨鼓をつける）。

盲目は神々に愛されし人

　　《大小の鬼は巫（督殿こうどの）の助手の巫》　シャグマとか鬘とかよばれる踊り手の被り物は、ほとんどの場合に顔の全面を覆いかくしている。そのために、踊り手は「鬼」とよばれる。シャグマなら中世から存在した、熊の毛で作った赤色の被り物だが、大鬼は黒い被り物をかぶっている。この被り物は、本来、踊り手が神がかりするための暗黒空間を作る装置であった。右上は恐山の盲目のイタコ。右下は岩手早池峰神楽権現の踊り手。暗黒空間は神と交流する通路。この権現舞の布と同じ被り物がやすらい花の大小鬼のかぶり物。

中国南部の傘の信仰　　《花傘は樹木》

花傘は山を表わす神降臨の依代と一般に説明されている。この説明は不十分。山ではなく樹木である。山も樹木も地母神の変身であることは同一であるが、傘は樹木の変化である。中国南部の少数民族トン族集落の中心には決まって傘型の鼓楼がそびえる。鼓楼は公共の場、政治の中心の議事堂である。その背後にはトン族の祖先神薩歳（サセ、老祖母の意味）を祀る聖母壇がある。女性の霊力が男性の政治を守る、長江流域の稲作社会に共通する精神構造をここに見ることができる。鼓楼は樹木信仰に支えられ、一本の大杉の上の棚から変化していったといわれ、完成形は傘である（劉芝鳳『中国侗族民俗と稲作文化』人民出版社、一九九九年

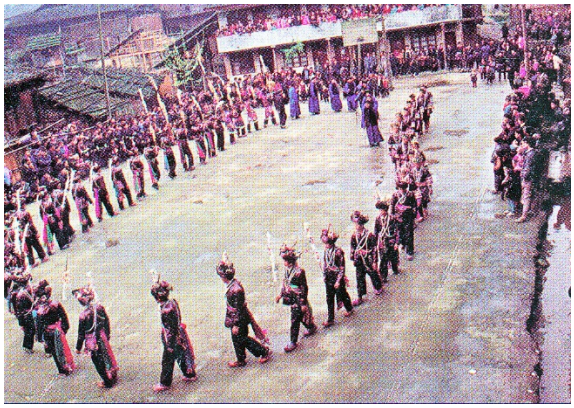
地母神信仰に由来する鼓楼

トン族の鼓楼は多くの集落で花橋とよばれる長い橋と連結している。貴州省黎平県でもその風景を見ることができた。道または橋と幽暗空間の組合せはあきらかに地母神の母胎の信仰に由来する。鼓楼の頂点には一個の大太鼓が掛けられ、集落に事件があったときに、長老が打って異変を伝える。

中国トン族の稲の祭りと京のやすらい花の一致点

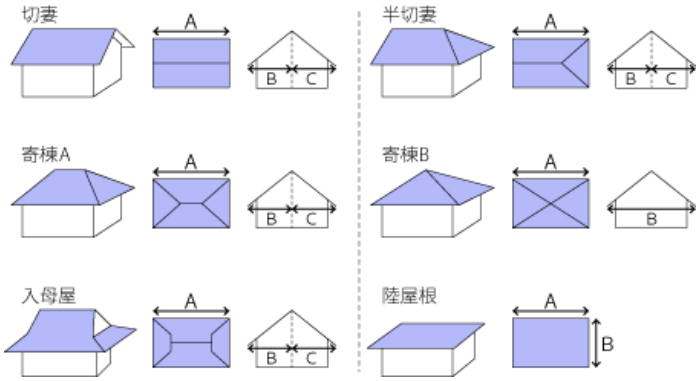
中国貴州省トン族に祖先の女神薩神（薩はトン族の言葉で「祖母」、裟とも）を祀る正月の祭りがある。この祭りは薩神を祀る祀堂での長老巫師による神迎えから始まる。祀堂のなかのご神体は半開きの古い傘。この傘は村の広場に運ばれ、以降、祭りの場はこの広場になる。広場の中央には祭壇が設けられ、魚、卵焼き、豆、酒などの馳走と大量の稲束が供えられている。祭壇の正面には八人の男たちが長椅子にかけており、彼らは頭からすっぽりと黒い布をかぶっている。やがて巫師たちの祈祷のうちに八人の男たちは、奇声を発して飛び上がり、膝を小刻みに震わせて神がかりになる。彼らは祭壇の稲の束を食べ、酒を飲み、激しく身体を震わせる。そして、小鈴を振りながら歌を歌い、唱え事をしているが、巫師が一人一人に息を吹きかけて正気にもどらせる（ビデオ『天地楽舞　中国五十五少数民族民間伝統芸能大系　トン族』日本ビクター、一九九七年）。やすらい祭と驚くべき相似がある。⑴　ご神体は傘である。⑵　ご神体はふだん祀る巫堂から祭りの場に運ばれる。⑶　踊り手は布（毛）をかぶって顔を覆う。⑷　稲の祭りである。⑸　広場での楽器による集団舞踊で盛り上がる。（６）　祭りを主導する巫師がいる。

サセ（薩歳・祖母神）を祀る祠、ご神体は傘、・広場の歌舞　中国貴州省黎平県　トン族



平成大嘗祭

日本建築の原型　傘に由来する日本建築　寄棟・切妻・入母屋



切妻造り　長辺側から見て前後2方向に勾配をもつ
寄棟造り　前後左右四方向へ勾配をもつ
入母屋造り　上部においては切妻造り、下部においては寄棟造りの構造

和風建築の典型　京風町屋　木造二階建て切妻造り

日本の建築構造の歴史一覧

Ａ　大地母神⇒大地⇒縄文円形住居⇒アイヌ円形住居⇒アイヌ寄棟住居（日本古代）

Ｂ　大地母神⇒樹木⇒樹木の上の祭壇⇒傘⇒樹木の上の住居⇒木造高床式⇒木造切妻二階建て（華南少数民族から日本）

Ｃ　木造切妻二階建て⇒木造入母屋高床式⇒寝殿造り⇒書院造り（日本の公家・武家・寺院）

Ａ＋Ｂ＋Ｃ＝民間和風建築〈土間、板の間、畳の間、大黒柱、寄棟、切妻、入母屋、二階建て〉

日本伝統的和風建築の重層性と神人同居

伝統的和風建築の代表京風町屋は、縄文以来の大地母神信仰を根底に、弥生以降に大陸から伝来した木造切妻二階建て・平安時代の寝殿造り・中世の書院造りなどを融合して、中世以降に日本を代表する建築となって、現代に継承された。

日本の伝統的和風建築は、土間・板の間・畳の間・中心の大黒柱の四つの構造が必ず備わり、多くは庭、それも中庭・奥庭を持つ。この五つをそのままに保存している典型が切妻二階木造の京風町屋である。いつも古いものを大切に残しながら新しく変わっていく日本文化の重層性の特色を京風町屋、さらに伝統的和風建築に明確に見ることができる。

大切に保存された古代のなかで神人同居の信仰は、日本の伝統住居の根幹精神であり、日本人は神と同居することによって心安らかに生きてきた。日本の伝統的建築には、現在も、重層性とともにはっきり神人同居の精神を認めることができる。

つづく